

# 学ぶ意欲を支える

## 釧路自主夜間中学「くるかい」（釧路市）

鈍い蛍光灯の光の下、左角コーナーでは文章の読み合わせ、その後方では漢字の書き取り、右前のグループは英語のレッスン、中央は算数の復習……。教室が5つにも6つにも分かれて熱心な勉強が続く。教える方も教わる側も白髪のお年寄りから10代の若者まで。メダカの学校ではないが、だれが生徒か先生か混然一体となって学習に取り組み、充実とした時間が流れてゆく。

これは、さまざまな事情で学校で学ぶことができなかつた人たちのために、釧路市の総合センターの一室で開かれている学びの教室・釧路自主夜間中学「くるかい」の授業風景。学ぶ側のレベルが異なるので、一般の学校授業のように先生が教壇に立って一律に教科書をひもとくわけにはゆかず、すべての教科がマン・ツー・マン（一対一）に近い対面授業だ。それだけに学ぶ内容は濃密で、一回90分の授業が終わっても「まだ学び足りない」といった表情で、生徒、先生とともにすぐには席を立とうとはしない。そこには教える、教わるの垣根を超えて、共に学び成長してゆこうという人生の希望と喜びが満ちあふれている。



だれが生徒か先生か…混然一体で学び合う学習者さんとスタッフさん

### ■ 志に燃える二人の出会いで発足

夜間中学は、戦争や家庭の事情、不登校や引きこもりなどで十分に学校に通えず、日常生活にも不便を感じている人たちに、気兼ねなく勉強できる場を提供しようと作られた学びの制度。国勢調査などの資料によると、義務教育に満足に通えなかつた人は全国でざっと16万人、北海道で約1万人、釧路でも270人前後。この人たちに、せめて日常生活だけでも支障のないように、“読み書きそろばん”を勉強してもらおうとの狙いでスタートし、自治体などが主導する公立と、民間有志の運営による自主方式の2つがある。道内には公立はなく、自

主中学のみ札幌、函館、旭川に 3 校あり、釧路の「くるかい」は道東で初、道内 4 番目として 2009 年 5 月に開校した。

釧路にできたきっかけは、同市内の主婦で、現代表の賀根村伸子さん（55）と現事務局長で北海道教育大学釧路校講師の添田祥史さん（31）の出会いから。開校に先立つ 2008 年秋ころ、賀根村さんは同市内で、不登校や引きこもり親子を元気づける支援活動を行っていた。一方添田さんは大学卒業後、北九州で自主夜間中学「青空教室」のスタッフをしていたが、道教大釧路校で行っている地域教育に惹かれ、同校で講師を募集していたのを機会に来釧。二人は同年暮れ、市内で開かれた公立夜間中学を主題とした映画「こんばんは」の自主上映会でばったり出会い、「釧路にも夜間中学がほしいね」の思いで意気投合。「こんな学校があったらぜひ通いたい」という就学希望者の声にも押されて設立準備会を結成。何度かの会合を重ね、会場やお手伝いをしてくれるスタッフの見通しをたて、青空学校や札幌の中学の協力も得て開校のメドが立ち、翌年 5 月、市中心部の旭町、総合福祉センターの一室で開校と決め広報活動に入った。校名の「くるかい」は、来たい人が誰でも気軽に来て学べるよう「来てみないかい」という親しみを込めて名付けた。授業料は学ぶ側の事情も考慮して月ワンコイン、つまり 500 円。教える側は経営が安定するまで当分の間、意気に感じてもらって無償のボランティアとした。

## ■ 学びたい人、支えたい人、

### 予想を上回る参加

年が明け 2009 年 3 月。学びたい人、それを支えたい人の募集を行って開設準備をしていた代表らは驚いた。受講の応募は 10 代から 80 代までざっと 50 人、職業は漁業者、農業者、主婦、会社員、不登校の中・高生、定年退職者とさまざま。一方支える側も似たような年代で 60 人以上も参加。こちらは元教員や教師を目指す大学生をはじめ主婦、事務員など社会のためにお役に立ちたいという面々。いまさらながら釧路地方で夜間中学が待望されていたことがわかった。

こうして同年 5 月、晴れて開校にこぎつけた。授業は毎週 1 回、90 分。時間は双方の都合に合わせて午後 5 時半からと 7 時半からの 2 部制。科目は実生活に密着したところからとの考えから国語、算数、英語の 3 つから 1 つか 2 つを選択。学ぶ側は年配者が多く“生徒”では失礼なので“学習者さん”、教える側も“先生”ではなく“スタッフさん”と呼ぶことにした。

授業の最初は“学習者さん”の学力レベルを知ることから。文章が読めない、漢字が書けない、足し算、引き算が覚つからない、アルファベットは初めてなど、個々人に差があるので、それぞれに合わせて分類し、“スタッフさん”を適材適所に当てはめる一対一の形で授業を開始。少し慣れてきたところで次第にグループ学習に切り替えて

いった。教科書も一般的なものは使えないので、スタッフが工夫して、一人ひとりがわかるように手づくりで対応。このかいあって“学習者さん”の学力はめきめき向上。漢字まじりでしっかりした文章を書けるまでになった高齢の女性、算数の加減乗除をマスターした男性、英語の看板を目にして日本語に訳せるまでになった初老の女性など、教える側のスタッフも目を見張るほどの成長ぶり。一方で授業の合間に、政治・経済の仕組みや現状を、人生の先輩の学習者さんから教えてもらった大学生のスタッフや、相手に対する思いやりや笑顔のすばらしさを高齢の“女生徒”から学んだ“先生役”の女子大生など、教える側も大いに学ぶという、共に学ぶ建学理念が見事に実現。何よりも「学びたい」という強い意欲がそれを支え、「勉強できることが当たり」と、ほぼ順風満帆の人生を送ってきた“スタッフさん”たちを感動させた。

### ■ 文集ににじむ熱き思い

それから1年。“学習者さん”の何人かは事情があってやめていったが、1年間計34回、がんばりきった人はおよそ30人。学校はこの1年間の成果を確かめ、今後の参考にするため学期末に参加者全員による感想文集「くるかい 夢をおいかけて生きる」を作成、発行。ページをめくってみると――。

学習者は「一時、こんな高齢になって学

んでどうする。という思いもありましたが、通っていて望外の喜び。今は楽しく充実しています。指導者ほかの皆様から心から感謝しています」(70代男性)。

「毎回、学んで楽しいなあ実感する2時間で、お友達もでき私にとって『くるかい』は宝物です。通学したことは一生忘れないでしょう」(50代女性)など、勉強する喜びと先生方に対する感謝の気持ちがどの文にも満ちあふれている。

一方、教える側も「教師を目指しているので参加させていただいてとても勉強になりました。ここで考えたり、したことは教師になった時など必ず生きるでしょう」(教育大、教師志望の女子大生)。

「笑顔で話しかけてくる生徒さんや様々なことを気付かせて下さる方々のお陰で、私も笑顔の大切さや考えさせられることが沢山あり、逆に感謝しています」(50代主婦)など、ここには札幌遠友夜学校の創設者・新渡戸稲造氏の「いつでも誰でも、教師、生徒の隔てなく共に学び合う」という理念にも似た雰囲気が見事に花咲いている。



参加者全員の熱い思いがぎゅっりつまった文集「くるかい」(右)とスタッフ手作りのこくご教科書

これについて代表の賀根村さんは「試行錯誤の連続でしたが、生徒さんの熱心さ、ボランティアの皆さんの熱い思いに、やってよかったな、この地域もまだ捨てたものではないなの思いでいっぱいです」と喜びを語る。

「くるかい」の特徴は、色々の分野からスタッフが集まってきていること、社会福祉協議会や市、各企業、スーパーなど地域社会全体が人的、経済的、精神面で学校を支援してくれることだ。行政は初年に20万円の直接援助をしてくれたほか、生活保護を受けている生徒の通学費や学費を助成し、あるスーパーではお客様が買い物をすると1%を寄付できる仕組みを作ってくれた。地元の病院や企業からは「病気や経済の講義をさせて下さい」との申し出があるなど、みんなで支えようという思いがいっぱい。創立にかかわり、現事務局長の添田さんは「私が釧路に来たのも、そんな地域が見てとれたからです。



授業のあと会場で、先生役・スタッフさんの真剣な授業検討会が続く

経営の面は寄付や支援で何とかやりくりしてゆけそうですので、今後は幹部やスタッフが代わっても学校を維持してゆける組織固めをしたい。授業面でもこれまでの教科に手紙の書き方やペン習字、時事問題などを加えてゆきたい。差し迫った問題としては、いま会場に使っている社会福祉センターは間もなく立ち退かなければならないので、どこか学校校舎が使えるようになればいいなあと思っています」と若い抱負を語っている。

■ 連絡先

〒 085-0826 釧路市城山 1-15-55

北海道教育大学釧路校添田研究室

釧路夜間中学「くるかい」代表 賀根村 伸子

TEL : 080-5595-7015

Email : waraku.8246@ezweb.ne.jp

URL: <http://kurukai08.exblog.jp/>